

中国語の構文分析法

The Method of Chinese Syntactic Parsing

鳥 井 克 之
TORII Katsuyuki

爲了再鞏固和確立新的教學語法系統而回顧過去的許多語法著作的看法、然後在此提出了教學語法系統具體的內容。這次對於有關漢語析句方法的問題考察以後、得到了下面的結論。即：漢語析句方法是不採用句子成分分析方法而應該採用直接組成成分分析方法（也就是說層次分析法）。直接組成成分一共有八種成分：主語、謂語、述語、賓語、補語、定語、狀語、中心語。謂語就是對於主語的成對概念、主語跟謂語一起組合成爲主謂結構、這個結構就是第一個層次分析對象；述語就是對於賓語或補語的成對概念、述語跟賓語一起組合成爲述賓結構、也跟補語一起組合成爲述補結構、這兩個結構就是第二個層次分析對象；中心語就是對於定語或狀語的成對概念、定語或狀語跟中心語一起組合成爲偏正結構、這兩個結構就是第三個層次分析對象。

キーワード

統語論成分 (Syntactic Elements) 統語論的構造 (Syntactic Structure)
文成分 (Element of Sentence) 文成分分析 (Syntactic Element Analysis)
直接構成要素分析 (Immediate Constituent Analysis)

1984年1月に上海教育出版社から出版された『漢語析句方法討論集』について書評論文を書き上げ、「中国語構文分析方法論争」と題して『関西大学文学論集』第36巻Ⅰ－4号（1986年）に発表した後、拙著『中国文法学説史』第二部「基本的文法範疇研究の変遷過程の考察」第6章「構文分析（析句）」Ⅰ「論争を可能ならしめた背景」、Ⅱ「論争の過程と内容」、Ⅲ「論争の総括」として収録した。今回はそれを全面に改稿し、1984年に発表された「人民教育出版社中学語文（中学高校国語）室『中学教学語法系統提要（試用）』」（以下「提要体系」と略す）の構文分析に関する説明を基準とし、基本的には前回同様な方法で論述するが、学説史的論評ではなく、新しい中国語教学文法を再構築するという目的で、具体的な構文分析法に関する教授方法（教案）を積極的に提示することをもって本論文の結論とした。

I 「提要体系」における構文分析法

「提要体系」は「6. 統語論におけるいくつかの問題点」の「6.5 文の図解」でまず「図解法で文を分析すると、イメージ化されて理解しやすいので、適宜採用すると教学に対して有益である。しかし分析は理解し、点検するのを助けるためのものであるので、一目瞭然的なものあるいはやや複雑であるが構造が明瞭であり、識別しやすいものは必ずしも分析のための分析を行なう必要がない」と「提要体系」全文の末尾に注釈を附した後、「6.5.1 単文の図解」と続くが、その冒頭で「符号法」についてやはり「提要体系」全文の末尾に注釈を附して「符号法は原文上に（じかに）符号を記入すると、比較的手間が省け、場所をとらないので、授業において使用すると比較的簡便である。樹木式図解法には異なる記入法があるが、ここでは複雑な局部を分析するときを使用するのに備えるために、ただ一種類だけを紹介するにとどめる」と述べて、本文では次の説明している。すなわち、

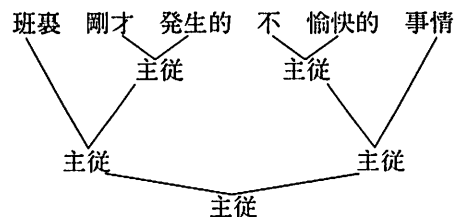
「符号法は縦二重線「‖（縦二重線）」で主述文を表わし、「‖」の前が主語で、その後が述語である。主述句がその他の句成分になる時には、主語の下には「=（二重アンダーライン）」を、述語の下には「_（一重アンダーライン）」を書く。

「|（縦一重線）」で非主述文を表わすが、非主述文の構造は主従、動目、動補など様ざまな関係があるので、「|」の上に関係を注記すべきである。

「~（波線）」は目的語を表わし、「()（丸括弧）」は連体修飾語を表わし、「[]（角括弧）」は連用修飾語を表わし、「<>（突起括弧）」は補語を表わす。なお「()・[]・<>」の三種類の括弧は同時に文を削減して、文の主要部分を際立たせる役割を果たす。例えば：

（三班）班長 ‖ [用幾句話] [就] [向老師] <清楚> 了 [班裏剛才發生的不愉快的] 事情。
（三組の級長が数言で先生に向かってクラス内で今しがた起こったばかりの不愉快な出来事ははっきり話した）

一般的なケースではここまで分析すれば十分である。もしさらに一歩進めてある複雑な局部を分析したければ、樹木式図解法を使用しても差し支えない。例えば：



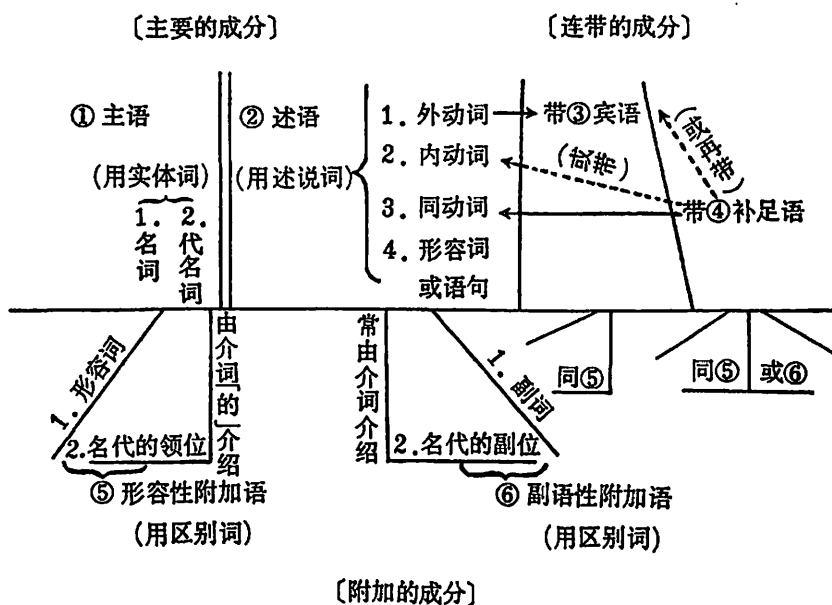
その後には「6.5.2 多重複文の図解」が続いて「6.5 文の図解」が終わり、「提要系統」の最終章「7. 文群（句群）」がある。

II 中国における構文分析法

本格的に章あるいは節を設けて構文分析法について論じている文法著作は1980年以前にはそれほど多くない。教学文法系統のものでは以下のものがある。

2-1 1920年代の構文分析法

黎錦熙(1924年)は「第三章 単句的成分和図解法 25. 単句図解法の公式和程序」で次のように述べている。すなわち、「先の各節で挙げた様ざまな統語論的図解の例について、一つの総体的公式に帰納すると次のようになる。



単文を図解するときの順序と手続きは、以下の各項に注意すべきである。

- (1) まず一本の主要な横線を描き、その上に主要な二重垂直線を書き加える（その位置はやや左寄りで、横線に到達する）。
- (2) まず全文のどの単語が主語であり、いずれの単語が述語であるか、即ち主要成分を見定める。明確に識別したならば、即刻この两部分を記入する。
- (3) さらに述語動詞がいかなる種類の動詞であるかを見て、その後に連帯成分があるか否かを決定する。
- (4) 連帯成分左の図解線は、横線上に（接着して）ある。目的語は一重垂直線になり、補足語は右斜線（左斜線でもよい）になる。
- (5) 最後に文中のすべての付加成分をそれぞれ記入する。
①まず主語に付くすべての形容詞性付加語を記入する。

②次に目的語（あるいは補足語）に形容詞性付加語があるか否かを見る。

③さらに述語動詞に付くすべての副詞性付加語を記入する。

- (6) 付加成分の図解線は、横線上に（接着して）ある。およそ形容詞性付加語に属するものはすべて左斜めに向かう。即ち領格（名詞・代詞、動詞、形容詞が連体修飾語になったものを指す）は左に移行する。およそ副詞性付加語に属するものはすべて右斜めに向かう。即ち副格（時間・場所を表わす名詞・代詞および前置詞句になる連用修飾語を指す）は右に移行する。
- (7) 主要成分と連帯成分は、品詞の数が有限のものである。ただ付加成分のみが限定されず、往々にして付加語の上にまた付加語が添加され、このように幾層にも添加しうる（23、24両節で図解した例＝二個以上の付加語が添加された例）。
- (8) この図解式については、ある一個の文中の各語句がいずれの品詞に属するものであるかを識別することができる。即ち、①いずれの一本の横線上にあらうとも、それはすべて名詞・代詞、形容詞あるいは動詞である（ただし特定の「主要動詞」即「述説詞（述語動詞）」だけは主要な横線上に接している）。②左向き斜線上のものはすべて形容詞であり、右向き斜線上のものはすべて副詞である。③横線下の直線（左右に僅かに斜めであつてもよい）の傍にあるものは前置詞である。即ち接続詞こそ前置詞の引申義的用法であるので、点線に改めて用いて表示するだけでよい。④助詞は語句の後に追隨し、感嘆詞は文の外に独立しているので、いずれも後で詳説するように図解法とは大きな関係がない。それ故に9種類の品詞は、すべて語句を図解した結果から、おのずと明瞭に弁別することができる。⑤ある一個の文中にどのような品詞の単語が如何程あるかを検査しようとすれば、一目瞭然である。」

と説明している。その後には〔注10〕として「図解法」について次のように注釈している。

「図解法は、英語ではDiagramであり、西洋の文法学界において近年とみに通用しており、極めて実用的な方法である。ただし、この「図解により品詞を弁別する」方法は、かえって本書の独創的なものである。なぜならば、中国語には「およそ単語は、構造に依拠して、その品詞を顕示する」というこのような特質があるからである。」

黎錦熙（1924年）の構文分析法は当時においてはまず構文分析を行なうこと自体が斬新的なことであり、かつ西洋の新しい方法を導入している点でもセンセショナルであったのは想像に難くないことである。多少の煩瑣な図解法も我慢できたかもしれない。詳細に分析すればするほど混雑した図になるので、その後この図解法が継承・発展されなかった最大の要因であると考えられる。これ以外に理論面からは次の点を指摘しなければならない。

第一に、「図解により品詞を弁別する」独創的な方法を賞賛しているが、これはその根底に「およそ単語は、構造に依拠して、その品詞を顕示する」と特質があるからだとしているが、実は主語や目的語になる単語は名詞であり、述語になるものは動詞であり、連体修飾語になる

ものは形容詞であり、連用修飾語になるものは副詞であると言うように、文成分と品詞性を直結した考え（1940年代にはこれを「一軸性」と称して批判され始めていた）がある。これに対して各文成分には様々な品詞の単語がなりうることができ、ただそのなりうる比率（分布度）が品詞により異なるだけだという考えが現在では定着している。

第二に、文成分は主要成分が主語と述語、連帯成分が目的語と補足語、付加成分が形容性付加語（連体修飾語）と副詞性付加語（連用修飾語）と三段階六文成分に分類している。しかしながら当時としては仕方ないことではあるが、「補足語」には現在言うところの補語以外に目的語、主述句目的語の述語部分、連動（連述）句および兼語句の後の述語部分などが包括されている。現在ではこの「補足語」は完全に「腑分け」されて適切な文成分に分類されている。

このような原因により、その後そのままでは継承されなかったが、しかし当時の文法研究の現状を考えると、画期的な金字塔が打ち立てられたのである。その後約半世紀後の現在では過去の遺産として、大胆にかつ簡便化する方向で継承して発展させたものが本章の冒頭に挙げた「提要体系」の構文分析法である。またやや煩瑣な図式方式を継承しつつ、教学文法体系に則した構文分析法を行なったものが呂冀平『漢語基礎知識』（1982年初版、2000年修訂版）である。

2-2 1960年前後の構文分析法

漢語課本系統の文法体系を踏襲する張志公（1959）は「第十四章 一般的単文の基本構造」の「3・43 文構造の分析」では主語と述語が文の主要成分であり、目的語、補語、連体修飾語、連用修飾語が連帯成分であり、この6種類の文成分はいかなる品詞が充当され、いかなる文法的手段（語順と虚詞の活用）により確定されるかをまず文構造を分析するための前提条件として十分に把握すべきであると強調している。次いで「3・44 一般的単文のパターン」では①主語と述語だけで構成された文、②主語と述語に目的語と補語が加わって構成された文、③主語、述語、目的語、補語、連体修飾語、連用修飾語の6種類の文成分で構成される文の3種類に分けて構文パターンを例示している。

①主語と述語だけで構成された文

1. 主語 || 述語（単独の動詞、形容詞）
2. 主語 || 判断合成述語（是＋名詞・代詞＝這是蟋蟀）
3. 主語 || 能願合成述語（助動詞＋動詞・形容詞＝弟弟会笑了）
4. 主語 || 方向合成述語（動詞・形容詞＋方向動詞＝朝陽升起來了）

②主語と述語に目的語と補語が加わって構成された文

1. 主語 || 述語＋目的語
2. 主語 || 述語＋間接目的語＋直接目的語
3. 主語 || 述語＋補語

4. 主語 || 述語 + 補語 + 目的語

5. 主語 || 述語 + 目的語 + 補語

③主語、述語、目的語、補語、連体修飾語、連用修飾語の6種類の文成分で構成される文

1. 連体修飾語 + 主語 || 述語

2. 主語 || 判断合成述語 (是 + 連体修飾語 + 名詞・代詞)

3. 主語 || 述語 + 連体修飾語 + 目的語

4. 連体修飾語 + 主語 || 述語 + 連体修飾語 + 目的語

5. 主語 || 連用修飾語 + 述語

6. 主語 || 述語 + 連用修飾語 + 補語 (他 || 來得太遲了)

7. 主語 || 連用修飾語 + 述語 + 連用修飾語 + 補語 (我們 || 都起得很早)

8. 主語 || 目的語 + 連用修飾語 + 述語 ([我用不着去問他]、他 || 誰都贊成)

9. 主語 || 連体修飾語 + 目的語 + 連用修飾語 + 述語 (他們 || 一間屋子都沒有)

以上18種類の文型を挙げている。なお現在とは異なる構文分析をしているものについては()内にその例文を示しておいた。しかしながらこのように文型を提示しながら、分析方法については具体的な説明を全く行っていないのである。

丁声樹等(1961)は「第三章 統語論的構造」で①主述構造、②補充構造、③動目構造、④修飾構造、⑤連合構造の五種類の句の構造関係とその成分について説明した後、「3.6 構文分析の方法」で次のように述べている。すなわち、

「上記で説明したことから我われの言語構造の特徴を見出すことができる。ある一つの構造に他の一つが組み込まれる、あるいはA構造とB構造が並列されても、結合するための成分は多くを必要とせず、その結合部分は天女の衣のように些かも不自然な縫い目がない。連合構造は二個以上の成分でも構成されるが、その他の四種類の構造は二個の成分により構成されるものである。このことが構文分析の手順を規定している。即ち、連合構造に対しては「多分法(一度に二個以上の成分に分割できる方法)」を採用するが、その他の四種類の構造に対しては「二分法(一度には二個の成分にしか分割できない方法)」を用いる。我われは幾つかの例を挙げて説明する。

東方紅、太陽升、中国出了個毛澤東。

(東が赤く、日が昇り、中国に毛澤東という人が現れた)

というこの文では三個の並列された主述句で構成されているので、まずそれを三部分に分け、しかる後に、一つ一つについて分析する。これが連合構造に対する「多分法」である。

帝國主義的侵略打破了中国人学西方的迷夢。

(帝國主義的侵略は中国人の西洋に学ぶという妄想を打ち破った)

この文はまず分析して主語と述語の两部分に分ける。主語が「帝國主義的侵略」であり、述

語が「打破了中国人学西方的迷夢」である。主語は修飾構造であり、「帝国主義的」が修飾語であり、「侵略」が中心語である。述語は動目構造であり、「打破了」は動補構造であり、「中国人学西方的迷夢」は修飾構造が目的語になっている。これが「二分法」の例である。」

と述べているが、簡潔ながら的を射た説明である。

これが後には「直接構成要素分析法」と称される分析法が、中国で最初に紹介・提起されたものである。中国語で「直接要素」と称されるものは、原典の英語で「Immediate Constituent」と言うものなので、「直接構成要素分析法」の略称を「IC分析法」と称し、「二分法」はその俗称であるといわれるようになった。

2-3 1980年前後の構文分析法

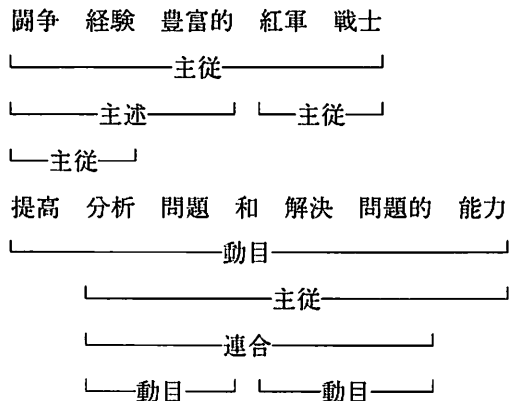
張志公等（1979）は本書の冒頭に紹介した「提要系統」の構文分析法の雛形とも言うべき方法を提起していた。

1980年前後にはほぼ同じプロジェクトにより出版された胡裕樹等（1979）、張靜等（1980）、黃伯榮等（1980）の三著作も構文分析法について論及している。今ここに三者を比較対照しながら紹介する事にする。

胡裕樹等（1979）は「第八節 統語論的構造と単文の簡略圧縮」の「一 統語論分析」で次のように述べている。即ち、

「文中の断片（例えば主語、述語、全文の修飾語など）が、もし一個の単語で構成されているのであれば、すべて絶えず二分して、その中の階層的関係を探し出す。これが統語論的分析である。

言語構造は階層性のあるものであり、単語と単語の結合はそのようなものである。例えば下記の句の中において、若干の語句の結合関係は直接的なものであり、若干の語句の結合関係は直接的なものでない。われわれはまず全体からそれらの構造を見定め、しかる後に絶えず二分して、階層とその関係を指摘し、線でそれを表わす。



このような分析は一個の単語に至るまで分析できることもあれば、また適当な所まで分析し

て中止することもできる。「適当な所まで分析して中止する」ということとは、つまり、分析する事により、この一言語の断片の様相を明瞭に見ることができさえすればそれでよいということである。もし必要がなければ、必ずしも毎回いつも最も基本的な結合単位まで分析する必要がない。……階層分析の方法は、基本的には絶えず二分することである。しかし多くの項目が並列された連合句あるいは多項目が関連しあう連動句においては「多分法」、即ち一度に同時に並列された数項目を分析して洗い出すのである。」と「I C分析法」の原則を述べている。

張静等(1980)は文をまず主語部分と述語部分と目的語部分の文の主要成分の三部分に分割してから、それらの各部分の中心語を探し出し、同時にそれらを前後から修飾あるいは補充する連体修飾語、連用修飾語、補語を指摘するという基本的には「文成分分析法」あるいは「中心語分析法」という構文分析法を採用している。

黄伯榮等(1980)は「第一歩は、主語部分と述語部分を分割する。ある文では述語部分からさらに述語動詞部分と目的語部分を分割することができる。第二歩は左から右へ、各部分の主要部分、即ち主語、述語、目的語を探し出す。主要部分が的確に摘出されれば、三種類の付加成分(連体修飾語、連用修飾語、補語)も容易に明確に弁別できる。このようにして、文の構成も明瞭になるのである。」と述べているが、張静等(1980)と同様に基本的には「文成分分析法」あるいは「中心語分析法」という構文分析法を採用している。

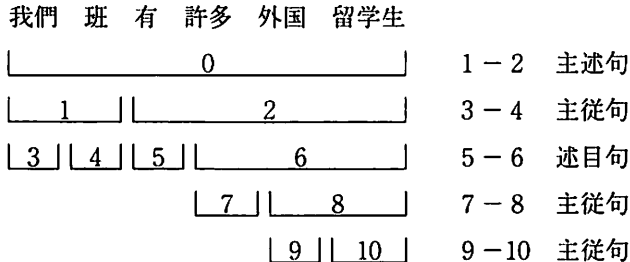
つまり、胡裕樹等(1979)が「I C分析法」を主張するのに対して、張静等(1980)と黄伯榮等(1980)は明らかに文の階層的関係構造を軽視して「文成分分析法」を採用しているのである。

朱德熙(1982)は「第一章 文法単位」の第三節「1.3 句」の「1.3.2」から「1.3.7」までにおいて主従句、述目句、述補句、主述句、連合句、連述句の六種類の句型について説明した後、「1.3.8」で「I C分析法」について次のように説明している。すなわち、

「上に挙げた各種の統語論的構造の例は比較的単純なものである。実際には統語論的構造は長くまた複雑でもありうる。なぜならば構造の基本類型は極めて限られたものであるが、しかしそれぞれの構造はそれ自身と同じ類型あるいは異なるタイプの構造を包括しうるからである。これらの包括された構造自体もまたそれ自体と同じ類型あるいは異なるタイプの構造を包括できる。このようにして一階層にまた一階層が組み込まれて、構造もまたますます複雑になっていく。次に一例を挙げて分析してみる。

「我们班有許多外国留学生(我われのクラスには外国人留学生が多くいる)。」自体は一個の主述句である。主語「我们班」は一個の主従句であり、連体修飾語「我們」と中心語「班」により構成されている。述語「有許多外国留学生」は一個の述目句であり、述語「有」と目的語「許多外国留学生」により構成されている。この目的語自体もまた主従句であり、連体修飾語

「許多」と中心語「外国留学生」より構成されている。中心語「外国留学生」もまた一個の主従句であり、連体修飾語「外国」と中心語「留学生」により構成されている。以上述べたところを図示すると次のようになる。



この図式は我われが「我們班有許多外国留学生」というこの構造を分析したときの実際の過程を反映している。我われは一度に0を直接3、4、5、7、9、10等の六個の単語に分けたのではなく、まず0を1と2の両部分に分け、しかる後にまた1を3と4の両部分に、2を5と6の両部分にそれぞれ分け、6はまた7と8の両部分に分けることができる。このように分析し続けていき、そのまま単語の段階になるまで分析する。われわれは1と2を0の直接構成要素といい、3と4を1の直接構成要素であるというのである。このように順次ある言語パターンの直接構成要素を探し出す手続きを「層次分析（直接構成要素分析＝I C分析）」と称している。「I C分析」は単に我われが統語論的構造を分析する時にある大きな断片を逐次小さい断片に区分する過程を反映しているのみならず、同時にまた統語論的構造の階層的構造を反映しているのである。

大部分の統語論的構造はすべて二個の直接構成要素により構成されるものであるために、「I C分析」は一般的に常に二分割する方法を採用する。だがまた二個以上の直接構成要素を持つ統語論的構造が若干あり、最もよく見かけるものが連合構造である。上文ですでに指摘した如く、連合構造の並列された成分は二項目以上であることができるからである。」

と述べ、さらに「1.3.9」ではこのように説明を続けている。すなわち、

「ある一個の統語論的構造を分析するとき、われわれはこの構造を構成する直接構成要素を一方では探し出さねばならず、また他方ではさらにこの二個の直接構成要素間の結合関係を確定しなければならない。例えば上に挙げた例において、我われは0を1と2の両断片に区分し、同時にさらにそれらの間の関係が主語と述語の関係であると確定した。また我われは2を5と6の両断片に区分すると同時に、さらにそれらの間には述語と目的語の関係があると確定したのである。」と「I C分析法」の要点について述べているのである。

Ⅲ 結論 教学文法における構文分析法

3-1 文成分分析法の長所と短所

文成分分析法の長所は主語、述語、目的語の主要成分の中心語を優先的に取り出すことにより、文の基本構造が把握でき、したがって文の大意を把握するのに極めて効率的である。

しかしその短所には次のものが挙げられる。

①肯定文と否定文が同型同義的なものとして認識される。肯定文を否定文に変換するには基本的には述語動詞あるいは形容詞の前に否定副詞を挿入するだけでよい。しかしその挿入された否定副詞は述語動詞あるいは形容詞を連用修飾するものとして取り扱われる。つまり文の主要成分ではなく、付属的文成分の連用修飾語であるので、文の基本構造から排除され、その結果、肯定文と否定文の差異が消失してしまうのである。「提要系統」を初めとする文成分分析法の説明においても否定文の場合には特別扱いする必要性を指摘している。

②主語、述語、目的語の主要成分の中心語を優先的に摘出する事により文成分分析法は中心語分析法と呼ばれている。しかし主要成分の主語、述語、目的語は勿論のこと、付加成分の補語、連体修飾語、連用修飾語の6文成分はすべていついかなる場合でも単独の単語あるいは修飾的主従句あるいは補充的主従句で構成されているとは限らないのである。主述句、述目句、連合句が文成分になることも大いにある。主述句、述目句、連合句には中心語が存在しないのでこれらの句が文成分になると、文成分(中心語)分析法は非力なのである。「提要系統」ですら「(文成分分析法では分析できない)ある複雑な局部を一步進めて分析しようとするのであれば、「樹木式図解(実質的なIC分析)」を使用してもよい」と述べている。

③中心語とある単語との関係は分かるが、数項目の付加成分の単語があった場合、いずれの単語がどのような順番で緊密度が高いかをということが明示できない。つまりすべての単語を同一レベルに並べて分析しているので、文の階層的な分析がまったく考慮されていない。したがって三語で構成されている比較的単純な多義句すら解明することができないのである。例：現代戦争小説＝連体修飾語1＋連体修飾語2＋中心語(現代の戦争の小説＝現代戦争の[＝を題材にした]小説＋現代の[＝に書かれた]戦争小説)

④主語、述語、目的語を主要成分としているが、その過程では主語と述語を主要成分とすることにはほとんど異議を挟む余地が無かった。だが目的語を主要成分と認定することには異論が続出した。俗流的論法では述語には動詞がよく充当される。動詞が述語になると後に目的語が伴われる。だから目的語は述語と同格の関係を有するものであるから主要成分と認定しようというものであった。これに対する反論として、

i. 述語には名詞、形容詞、主述句がなり、いずれも目的語を必要としない。

ii. たとえ動詞が述語になっても必ずしもすべていついかなる場合でも目的語を伴うとは限らない。

iii. もし仮に目的語を主要成分にするのであれば、述語になった動詞あるいは形容詞の後にある補語も主要成分と認めるべきだ。そうなれば主要成分が4個、付加成分が2個になるので、目的語を主要成分と認定することは論理上容認できない。

iv. 上記の俗流的論法に対する最も有力な理論的な反論はこれまでの主語、述語、目的語3文成分間の関係を総括する朱徳熙（1983）の論文であった。即ち「正常な状況下では、「主語」は必ず「謂語」の前にあり、「賓語」は必ず「述語」の後にある。「主語」と「謂語」の間の関係は緩やかであり、中間に停頓（ポーズ）を置くことができる。「述語」と「賓語」は意味上と構造上の関係はいずれも極めて緊密であり、その間に停頓を置くことができない。「主語」は「謂語」に対して言うものであり、「賓語」は「述語」に対して言うものであり、「主語」は「賓語」と直接的な連繋がない。……「賓語」の前には必ず「述語」が無ければならない。しかし必ずしも「主語」があるとは限らないのである。」と述べて、主語の対概念としての「謂語」と目的語の対概念としての「述語」を峻別したのである（この点については拙稿「中国語の統語成分」で詳論している）。この理論は文成分分析法の限界を指摘しているだけでなく、直接構成要素分析法の根本原則を確立する上で必要欠くべからざるものであった。

以上の考察から中心語分析法の長所はI C分析法の短所であるが、中心語分析法の短所はI C分析法の長所により克服されるものである。したがって高校生以上の中国語教学文法における構文分析法はI C分析法を採用せざるを得ないものであるし、また当然採用されるべきものでもあると考えるのである。

3-2 直接構成要素分析法設定の前提条件

I C分析法を行なうに際して最も必要な手続きは与えられた言語単位を二分して、かつ二分された両言語単位の間文法的構造関係を指摘することである。そのためにはまず簡単な二個の単語で構成された言語単位、即ち句を想定すると、句とは何か、句にはどのような種類のものがあるか、そしてまた句を構成するものにはどのような言語単位、つまり文や句を構成する統語論的成分（以下略して「統語成分」と称する；この用語に関しては拙稿「中国語の統語成分」を参照）にはどのような種類のものが何個ありうるのか、さらにそれらの各種統語成分相互間の関係はどのようなものであるか等などについて明確な理論的認識が必要である。逆に言えば、統語成分と句に関する基本理論に対する理解があれば、I C分析を行なうことができるのである。

3-2-1 統語成分の階層性、種類、充当語句

統語成分については拙稿「中国語の統語成分」で詳細に論議している。その結果、教学文法における統語成分は全部で8種類あり、それらは3段階・階層に区分されると教授すべきであ

ると提起した。

即ち、分析の第一段階における統語成分には主語（主語部分＝主部）と述語（述語部分＝述部）の二種類があり、分析の第二段階における統語成分には述語動詞・形容詞語句、目的語、補語の三種類があり、分析の第三段階における統語成分には中心語、連体修飾語、連用修飾語の三種類がある。

なお各統語成分になりうる語句の種類については次のように指摘している。

即ち、第一階層の統語成分である「主語部分＝主部（主語）」には

- ①名詞性語句 ②非「么／样／么样」系代詞 ③動詞性・形容詞性語句

第一階層の統語成分である「述語部分＝述部（謂語）」には

- ①動詞性・形容詞性語句 ②「么／样／么样」系代詞 ③名詞性語句

第二階層の統語成分である「述語shuyu」には

- ①形容詞性または動詞性語句

第二階層の統語成分である「目的語（賓語）」には

- ①名詞性語句 ②非「么／样／么样」系代詞 ③動詞性・形容詞性語句

第二階層の統語成分である「補語（補語）」には

- ①動詞性・形容詞性語句 ②「么／样／么样」系代詞 ③数量詞句

- ④程度副詞（很・慌・極了）

第三階層の統語成分である「定語・状語の中心語（中心語）」には

- ①名詞性語句または動詞性・形容詞性語句

第三階層の統語成分である「連体修飾語（定語）」には

- ①形容詞性語句 ②名詞性語句 ③数量詞句 ④非「么／样／么样」系代詞

第三階層の統語成分である「連用修飾語（状語）」には

- ①副詞全体 ②形容詞性語句 ③数量詞句 ④「么／样／么样」系代詞

がそれぞれなりうる。

3-2-2 句を構成する統語成分と句型

統語成分が結合して句（拙稿「中国語の句」で詳論している）を構成するときには、次のような原則を確認しておく必要がある。

即ち、必ず同一階層に属する統語成分間でのみ結合可能であり、異なる階層に属する統語成分間では結合できない。以下の基本句型の例文では二語で構成される句に限定する。

第一階層の統語成分である「主語部分＝主部（主語）」と「述語部分＝述部（謂語）」の間では「主語＋述語（名詞・代詞＋名詞・動詞・形容詞）」で構成される「主述句」のみである。

例文：今天晴天 花開 他（很）好

第二階層の統語成分である「述語形容詞・動詞（述語）」、「目的語（賓語）」、「補語（補語）」

の間で構成される句は「述目句」と「述補句」の二種類ある。即ち、「述語形容詞・動詞（述語）」と「目的語（賓語）」との間では「述語＋目的語（動詞＋名詞・代詞・動詞・形容詞）」で構成される「述目句」がある。

例文：吃香蕉 打他 洗衣服 喜歡唱（歌） 喜歡安靜

なお「述目句」に帰属するものに「前置詞句（前置詞＋目的語（前置詞＋名詞・代詞）」がある。

例文：（住）在家里 跟他（説）（走）向勝利 為人民（服務）

「述語形容詞・動詞（述語）」と「補語（補語）」との間では「述語＋（得）＋補語（動詞・形容詞＋（得）＋動詞・形容詞・副詞）」で構成される「述補句」がある。

例文：笑起來 記清楚 説得清楚 描写得細緻 熱得要命 好得很

第三階層の統語成分である「定語・状語の中心語（中心語）」、「連体修飾語（定語）」、「連用修飾語（状語）」は句型的には「連体・連用修飾語＋（的・地）＋中心語」で構成される「修飾的主従句」の一種類しかない。しかし中心語の有無と品詞性により次の三種類に分類できる。

- ①「連体修飾語＋（的）＋中心語（名詞・動詞・形容詞・代詞・数量詞＋（的）＋名詞）」で構成される「連体修飾的主従句」

例文：祖国大地 前進的步伐 偉大理想 我的故郷 一封信

- ②「連体修飾語＋的（名詞・動詞・形容詞・代詞＋的）」で構成される「「的」字句」

例文：学校的 我的 吃的 看的 便宜的 落後的

- ③「連用修飾語＋（地）＋中心語（副詞・動詞・形容詞＋動詞・形容詞）」で構成される「連用修飾的主従句」

例文：馬上走 好好兒地學習 很好 太便宜

なお同一統語成分であり、しかも関連性のある同一品詞で二語以上の単語が対等の資格、つまり相互に「中心語」的文法的地位で並列されて構成される「連合句」がある。

例文：多快好省 我和他 北京、上海、天津和重慶

この「連合句」に属するものには三種類の句がある。すなわち、

- ①前後二つの名詞性語句が同一の人・物などを指している「同格句」

例文：中国的首都北京 工程師李建国同志 他們三位

- ②「名詞性語句＋方位詞」が「連合句」的關係で結合した「方位句」

例句：学校裏 大門外頭 大橋前面

- ③「数詞＋量詞」が「連合句」的關係で結合した「数量句」

例文：三個 五斤 一百零八条 九次

以上が二語あるいは二言語単位で構成される句である。ただし連合句は三語以上の場合もありうる。以下は最少でも三語なければ構成できない句であり、三種類ある。すなわち、

①「述目句・述補句+述目句・述補句」で構成される「連述句」

例句：打電話通知他 看着報吃飯 拿了去 站着看

②「述目句*主述句（前の目的語と後の主語は同一単語が重なり兼ねる）」で構成される「兼語句」

例句：請父親写文章 叫学生去 令人高興 喜歡他認真

③「構造が対照的な慣用語句または四字熟語の成語固有名詞」で構成される「固定句」

例句：高一脚低一脚 東奔西走 刻舟求劍 中華人民共和國

3-3 IC分析法の具体的手順

IC分析法の具体的手順は基本的には①まず何処で二分するかという問題であり、同時に②その分割してできた二個の言語単位はいかなる文法的構造関係を構成しているかを指定することである。実は①と②は相互に同時に考慮しあいながら、決定あるいは指定しなければならない関係にある。

3-3-1 言語単位を分割する方法

まず与えられた中国語の言語単位全体をよく観察した後、意味的にまた同時に構造的に何処で大きく二分できるかを考慮して決定する。決定して二分割した後、さらに二分割された言語単位をそれぞれ最初と同じように二分割し、言語単位が一単語になるまで繰り返して二分割を続けるのである。

ただし連合関係で結合した連合句は二分割だけでなく、同時に三個以上、つまり三分割や四分割、あるいはそれ以上に分割する必要があることがあるので注意しなければならない。

3-3-2 二言語単位間の統語論的關係を決定する方法

与えられた言語単位を毎回二分割すると同時に、分割された二言語単位間の統語論的關係を決定しなければならない。その決定手続きの標準的な順序は次の通りである。即ち、

第一段階では、普通は最初に分割された二言語単位間の統語論的關係はまず主語と述語（謂語）で構成された「主述関係」であるか否かを検討する。そうであればその言語単位は主語と述語の備わったいわゆる主述文であることが確認されたことになるのである。そして前の言語単位の下には「主」を、後の言語単位の下には「謂」をそれぞれ書き入れる。もしそうでなければ次の第二段階に進む事になる。

第二段階では、通常は最初あるいは何度か二分割された二言語単位間の統語論的關係が第一段階の検討の結果、「主述関係」でなかった場合には、次の第二段階として、それらは述語動詞・形容詞と補語で構成された「述補関係」あるいは述語動詞と目的語で構成された「述目関係」のいずれかであるか否かを検討する。もしそのいずれかであれば、前の言語単位の下には

「述」を、後の言語単位の下には「目」または「補」をそれぞれ書き入れる。もしそのいずれでもなければ次の第三段階に進む事になる。

第三段階では、一般的に最初あるいは何度か二分割された二言語単位間の統語論的關係が第一段階の検討の結果、「主述関係」でなく、また次の第二段階の検討の結果、「述目関係」あるいは「述補関係」のいずれでもなかった場合には、第三段階として、それらは連体修飾語（定語）と体言性中心語あるいは連用修飾語（状語）と用言性中心語でそれぞれ構成された「体言・用言修飾の主従句」であるか否かを検討する。もしそのいずれかであれば、前の言語単位の下には「定」または「状」を、後の言語単位の下には「中」をそれぞれ書き入れる。もしそのいずれでもなければ次の第四段階に進む事になる。

第四段階では、最初あるいは何度か二分割された二言語単位間の統語論的關係が第一、第二、第三の各段階の検討の結果、「主述関係」、「述補関係」、「述目関係」、「体言・用言修飾の主従句」のいずれでもなかった場合には、「連合句」、「同格句」、「方位句」、「数量句」、「連述（連動）句」、「兼語句」、「固定句」であるか否かを検討する。もしそうであれば、前の言語単位の下には「連・同・方・数・連・兼」を、後の言語単位の下には「合・格・位・量・動・語」をそれぞれ書き入れる。ただし「固定句」は分割せずにその言語単位の下に「固定句」と書き入れる。

3-3-3 文成分分析法と直接構成要素分析法との対比

この小節の詳細な論議については拙稿「中国語の統語成分」の「3-2 統語成分の種類と階層性」の「3-2-1 統語成分の種類」および「3-2-2 統語成分の階層性」で論及しているのでその例示だけにとどめている。

3-3-3-1 典型的文成分分析法の例示

(連体修飾語) → 主語 | | [連用修飾語] → 述語 ← <補語> : (連体修飾語) → 目的語

3-3-3-2 典型的文成分分析法に対する直接構成要素分析法の例示

連体修飾語	主語	連用修飾語	述語	補語	連体修飾語	目的語
主語		謂語				
定語	中心語	述語		賓語		
		述語	補語	定語	中心語	
		状語	中心語			

3-3-3-3 特殊な文型に対する直接構成要素分析法の具体例

①二重目的語をもつ文

我 告 訴 他 他的 学 校 從 明 天 放 假

主	謂									
	述		目							
	述	目	主		謂					
			定	中	状		中			
					前	目				

②述語が連述（連動）句である文型

我 打 電 話 通 知 他

主	謂			
	連		動	
	述	目	述	目

③述語が兼語句である文型

母 親 請 父 親 写 文 章

主	謂			
	兼		語	
	述		目	

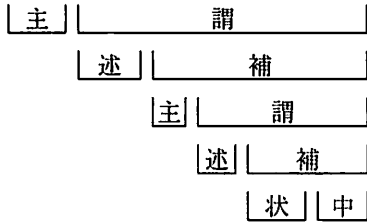
④数項目の連用修飾語を有する文型

那 個 菱 角 就 又 安 安 穩 穩 浮 在 水 面 上

主		謂									
定	中	述				補					
		状	中			前	目				
		状	中			方		位			
		状		中							

⑤複雑な補語を有する文型

昨天 冷得 手 伸 不 出来



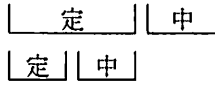
⑥複数の構文分析が可能な多義構造

現代 戦争 小説



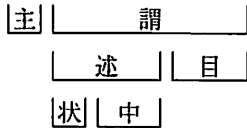
（現代に書かれた戦争小説）

現代 戦争 小説



（現代の戦争を書いた小説）

我 要 学习 文献



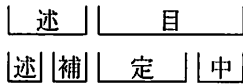
（私は文献を学習したい）

我 要 学习 文献



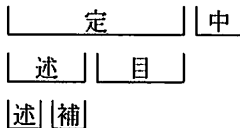
（私は学習する文献が欲しい）

咬死了 獵人的 狗



（獵師の犬をかみ殺した）

咬死了 獵人的 狗



（獵師をかみ殺した犬）